いもがかど行すぎがてにひぢかさの雨もふらなんあまかくれせん

顯昭云、此歌にひぢかさ雨といへるはひが事也、これは万葉集の歌なり、彼集にはひさかた雨といへり、考、万葉集第十一云、

いもがかどゆき過かねつひさかたの雨もふらぬかそをよしにせん○略中

六帖曰、いもがかど行すぎかねつひぢかさのあめもふらなんあまかくれせん

此歌は万葉の歌をやはらげたる歌也、第三句のひさかたを、ひぢかさと書たる也、ひぢかさ雨と云物不可有也、

〔八雲御抄三上天象〕雨○略中　ひぢかさ　さとふるに、ひぢをかさにするなり、

〔催馬樂〕妹之門

いもがかどや、せながかど、行過かねてや、わがゆかば、ひぢかさの、ひぢかさの、雨もやふらなん、玄でたをさ、雨やどり、かさやどり、やどりてまからん、玄でたをさ、

〔空穗物語菊の宴〕ひぢかさあめふり、かみなりひらめきて、おちかゝりなんとする時に、○略下

〔源氏物語十二須磨〕ひぢかさ雨とかふりきて、いとあはたゞしければ、みな返り給はんとするに、笠もとりあへず、さるこゝろもなきに、よろづ吹ちらし、又なき風なり、

〔枕草子八〕名おそろしき物　ひぢかさ雨

〔新撰字鏡水〕涑多貢力見二反、去、暴雨、波也佐安女、

〔倭名類聚抄一雲雨〕暴雨　楊氏漢語鈔云、白雨和名無良佐女

〔箋注倭名類聚抄一風雨〕按、謂物之不平等爲无良、與羣村同語、故謂暴降倏霽之雨爲无良佐女、新撰字鏡云、涑暴雨、波也佐女、萬葉集暮立之雨皆是類也、○略中　白雨、見李白杜甫楊巨源詩、又南卓羯鼓錄、頭如青山峯、手如白雨點、此卽羯鼓之能事也、山峯取不動、雨點取碎急、爾雅暴雨謂之涑、按、說文、

暴雨
白雨